

祭囃子が聞こえる。近くはないが遠くもないらしい。近所の一軒家から浴衣姿の少女とその両親が出てきた。おそらくはスピーカーでながしている太鼓と笛の音量と一家の様子から、安住恵一郎は祭り会場が歩いて行ける距離にあることを推定した。

安住恵一郎は夕飯を簡易食で済ますつもりでいた。しかし安住はそれを翌日の昼か夜に持ち越すことを決定した。

彼は彩りを求めたのだ。労働と執筆と読書と運動の日々に彩りが欠けていることを、祭りという彩りを前にして自覚した。こころはすでに踊り始め、舌は唇を湿らせた。幸い、今日の分の執筆はすでに終わっていた。であれば、祭りに出かけても問題はなかった。

財布とガラケーと、迷わずに本を肩掛けのバッグに入れて家を出た。通りに先の家族の姿はなかった。音と土地勘を頼りに祭り会場に向かうことにした。

祭囃子を聞きながら、歩きながら、ふと空を見る。

八月でもまだまだ陽は長かった。十八時よりも十九時の方が近い時間になっているというのに空はまだ夕方を思わせた。紫と茜が入り交じる、魅力的な色をしていた。

恵一郎は既視感を覚えた。さほどむかしではない。三年前に見た覚えのある空だった。

「……………」

懐古しかけた。しかしすぐに思い出すのをやめた。否、抑えた。否、断ち切った。

祭囃子が段々段々と近くなる。滲み、流るる汗は拭かなかった。目に干渉するものだけは指ではじいた。

途中、信号で立ち止まった彼はすぐそこにあるコンビニを見た。詳細にはアイス売り場を見ている。アイスを買ってしまったおうかという考えがよぎったのもあるが、それに靡く彼ではない。アイス売り場にはおそらく大学生だろうと思われる男女がいた。したたかな目をしていて彼の目が不覚にも一瞬もの悲し気になった。不覚と感じたのは信号が視覚障害者に配慮した例の高音を鳴らし始めた後だった。

彼はハッとして前を見る。信号が変わっている。そして白杖をすべらせる男性がいる。恵一郎は声をかけなかった。ただ、視覚障害者が渡り切り、点字ブロックにたどり着くまでを見届けてそのまま横を素通りした。

段々段々と音が近くなっている。人の数もほつりと増えていた。彼の足は迷わずに道を進んでいた。会場は桜の綺麗な寺社の境内であることに疑いはなかった。

境内に入り、石畳を歩きながら恵一郎は考える。

何を食べ、何を飲もうか。

タコヤキ。お好み焼き。焼き鳥。ビール。りんごあめ。大判焼き。屋台は様々だった。

ひとりでは食い切れないな、ふたりだったら……、と考えかけてまだまだ忘れられていないことを自覚する。沈んだ目になった彼は、ふう、と疲れたように息を吐く。

そうさせる過去の記憶を嫌ってはいなかった。だからこそ、彼にはとても悩ましかった。